

クイーンズランド補習授業校における運営指導とその実践

前クイーンズランド補習授業校 校長

私立暁星国際中学校 教頭 丸山 吉信

キーワード：在外教育施設、補習校、オーストラリア、補習校運営

1. 派遣先の概要

クイーンズランド補習授業校という名称は、オーストラリアのブリスベン補習校とゴールドコースト日本語補習校とが統合した後の名称であり、現実には、それぞれ別々の学校である。派遣教員は、平日は80km離れた2つの市の事務所に1日おきに通い、授業日の土曜日には隔週で各校舎に赴く。生徒数は、ブリスベン校が210名、ゴールドコースト校が160名の学校である。幼稚部、小学部および中学部から成っているが、大部分は小学部の児童たちで構成されている。ブリスベンには日本の大手商社すべての事務所を始め、他の多くの日本企業のオフィスがあり、駐在員が多いが、ゴールドコーストに住む日本人は大部分が永住者である。永住者はゴールドコーストだけでなくブリスベンでも増えており、その大部分は母親が日本人、父親がオーストラリア人という家族構成になっている。このことから、継承言語としての日本語学習を期待する家庭と日本の学校教育を期待するグループとの2つグループが補習校に通学している。

2. 私の実践

補習校への着任は、新校長に期待を寄せる保護者や一部教員からの苦情や陳情を聞くことからの出発であった。これは、保護者の間に様々な不満が充満していたときに赴任したという时期的な要素もあったが、私自身が国内において帰国子女とともに30年間を過ごした後での赴任であったため、それなりの思いが私自身の中にあったことが私を大きく動かしたと思われる。かくして、問題点の分析とそれに基づく改革を進める長旅がスタートした。当時の補習校は、学校というよりも、「国語と算数の補習塾」のような状況であり、教員と児童生徒および保護者とが一緒になって地域の子供を育てていくという学校の特色が機能していなかった。学校行事は日本人会行事に移管されていたり、教員が関わらない形で行われており、教育としての特別活動は廃止されていた。そのような中で、問題点分析を通じてクローズアップしたことは、「補習校とは何か」ということについての解釈がまちまちであるということであった。そこで、『在外教育施設運営参考資料』p.8にある「補習授業校は、(中略)国内の学校に編入した際にスムーズに適応できるよう(目的)、日本国内の小学校または中学校の一部の教科について基礎基本を習得するための授業(内容1)を国内で使用する教科書を用いて、日本語により行うとともに(方法)、日本の学習習慣、生活習慣などを指導し、併せて日本の学校文化を体験させる(内容2)ことを目的とする教育施設」という定義についての理解を現地採用教員および保護者に図り、「日本の学習指導要領の内容を凝縮、精選して提供する」「学校」としての姿の追求に努めた。即ち、総則の「生きる力」を育むという大前提の下に、基礎基本の習得を目指した教科指導、学校教育全体を通じての道徳、生活指導、そして日本人としてのアイデンティティを涵養する「特別活動」の実施に努めた。具体的には、以下の通りである。

- (1) 「補習授業校のための指導資料集」や教師用指導書を活用するなどして、国語、算数(数学)教科書各単元の観点別目標に沿った授業の実施。
- (2) 「国語の授業=漢字の授業」にならない工夫としての指導・助言と漢字ドリルの詳細版の廃止。
- (3) 基礎基本の定着を目指し、反復型ドリルに変更するとともにバラドリルの追加。
- (4) 国語と算数(数学)に加え、理科と社会科の授業実施。
- (5) 学級活動として「清掃」を実施(オーストラリアでは、通常、子供に掃除をさせることはない)。
- (6) 学校行事を学習指導要領の「特別活動」の項にある目標に沿う形で実施。

①「儀式的行事」

厳粛さを尊ぶ精神を涵養するため、従来、式の中で行われていた謝恩会的な要素を式後に分離し、式を厳粛なものにした。また、埋もれていた校歌を復活し、式の中で歌えるようにした。

②「文化的行事」

創造性を養うことを目的とし、従来、日本の夏祭りや縁日のように捉えられていた行事を発展させ、「補習校祭り・絵画展」として文化祭に準ずる「学び」の学校行事とし、これをさらに、作品展、学習発表、舞台発表、模擬店等から成る「文化祭」に発展させ、「つくる」ことを学べる工夫をした。



③「体育的行事」

運動会を学校行事として充実させ、集団行動の体得、集団への帰属感、責任感と連帯感の涵養に努めた。ブリスベン校においては、学校行事としての「学び」の運動会が行われていなかったため、運動会についての教育的な考え方の普及に努めるとともに用具の整備に努めた。ゴールドコースト校においては、運動会についての教育的な考え方の普及に努めるとともに保護者が運営していた運動会を「教員が指導し、児童生徒が学び、保護者が手伝う」方式に変更した。



- (7) 決定機関となっていた職員会議を諮問機関とし、日本の学校教育法に従い、校長の決定権を尊重する体制作りに努めた。
- (8) 教務主任を配置し、校務が円滑に進められるよう、整備した。
- (9) 学級日誌を導入し、校長がクラスの状況を把握しやすくした。
- (10) 出勤簿、出席簿、通信簿、指導要録を整備。
- (11) 「学級通信」を通じて家庭との意思疎通を改善。
- (12) 校名を変更した。旧校名は「日本語補習校」であったが、「日本語」を取り除き、単に「クイーンズランド補習校」とした。これは、永住者や国際結婚家庭が増える中で、補習校は日本語塾ではなく、学習指導要領に基づく日本の学校教育全体を凝縮、精選して提供する施設である、という視点を崩さずに教育活動を続けることが大切であると考えたからである。継承言語としての日本語教育を求める方々からは様々な指導法の紹介を受けたりもしたが、結局は、日本語学校化するよりも日本の学校教育の提供に徹する方が

却って日本語力自体も向上させられるということ、幼稚部から補習校を続けてきたゴールドコーストの中学3年生たちが私に教えてくれた。彼らの作文力は素晴らしく、日本の国内生以上のものであった。

3. 派遣を終えて

4年間の滞在は終始多忙で心労との戦いの日々であったが、やれるだけのことはできたと思っている。我が国がグローバル人材の育成を急務とし、その育成計画の中で、日英語を基盤としたコミュニケーション力、日本人としてのアイデンティティ、道徳心、理数力を育むことを課題としている折でもあり、バイリンガル子女が集う補習校に期待されることは大きく、その整備に努めることができたことは幸いであったと思っている。領事館、文科省、財団、派遣元、運営委員会、保護者、教員、児童生徒、事務、等の方々からの多大な理解と支援、協力があつたことに大変感謝している。